



## 秋の季節に思う

今年の8月は昨年と比較して最高気温が40℃を越える猛暑日に悩まされる状況は少なかったようで、昨年のような連日の熱中症に伴う救急搬送の回数は明らかに減少したと思われた。善走会が毎年行う土用稽古の記録によると今年の気温は例年に比べて低かったことを示していた。

ところで毎年9月1日は立春から数えて二百十日目に当たり、古くから巨大台風の襲来に悩まされる厄日とされている。これは江戸時代中期の暦学者渋川春海が貞享暦に書き入れてから一般に知られたが、この時期は稲の開花期にあたり農家では特に警戒を要する時期として恐れられている。

更に“災害は忘れた頃にやってくる”と言われ、九月一日を「防災の日」としたのは大正十二年九月一日に起こった関東大震災を祈念して定められたものである。これは台風や高潮、地震や津波などの大災害についての国民の認識を高め、これに対処する心得を目的として認定されたものである。

今年は大規模台風による甚大な被害は免れたが、ここで台風の物理的現象について【倉嶋厚著（お天気博士の四季暦）から引用して】簡単に説明してみたい。台風は主として太平洋の海面水温が27℃以上の温かい海上で発生し発達するものであって、陸上では殆ど発生しない。それは台風のエネルギーが水蒸気だからである。太平洋や熱帯の海では照り付ける太陽の熱によって、海水が目には見えない水蒸気となって大気中に立ち上る。

水は水蒸気になるときに1gについて約600カロリーの特別な熱を必要とする。水蒸気はこの熱を照り付ける太陽からもらって、水蒸気の中に蓄えたまま空気中に浮かび、この水蒸気が台風の卵の中で雲になる。つまり大気中で元の水に戻るといふ。その時、太陽からもらった熱を大気中に吐き出し、つまり「水蒸気が燃える」という現象が起こるのである。

そしてその熱が雲の中の空気を暖めて、熱気球のように浮力を強めるので空気はますます勢いよく上空に立ちのぼると、海面近くでは周囲の空気が雲の下に向かって集まってくる。その気流が地球の回転の影響で渦巻になり、このようにして台風が発生し、発達するという。（台風のできる現象の説明）

更に、台風圏内で燃える水蒸気と一緒に放出する熱は水爆400個分と見積もられていて、そのうちのごく一部が台風の嵐を維持しているという。そして台風は水蒸気を燃やして走る蒸気機関車とも言えると述べている。

もう一つの現象として「台風は真水の塊だ」ということであり、即ち太陽は塩分の多い海水を蒸留して真水に変えて、台風という大きなバケツで陸に運んでくる怪物といえるとも説明されている。

次に秋の季節に見られる様々な自然界の変化を探してみると、その一つは秋の空は透き通った美しさだと思われる。一般に秋の空は青く美しいと単純に思われているが、これを科学的に見ると、大気中の分子が七色の太陽光線のうち波長の短い青系統の光を主に散乱させ、それが人の目に入るためである。しかし大気中に水蒸気や埃が多いと、波長の長い他の光も散乱させてそれが目に入るため白くかすんで見えるのである。

この美しい青空をもたらす高気圧は中国大陸の空で生まれた湿度の低い気団（空気のかたまり）で、日本の上空を覆う高気圧は季節によって変わり、秋から冬はシベリア気団や揚子江気団の張り出しが多くなり、秋の空を一層青く透き通った美しさにするので知られている。

更に青空を彩る秋特有の雲には羽雲、さば雲、うろこ雲、絹層雲、太陽には笠雲、飛行機雲など様々なものが見られる。飛行機雲が崩れて広がったものに絹雲、巻積雲、高積雲など色々な種類があり形もさまざまだがどれも細長く続いている特徴の雲である。また同じような細長い雲は地形の影響でもできることがあり上空に西風が吹いているときに出来るものはレンズ雲という。

また、虫たちと天気との話があり、晴れた日の夕方センチコガネ虫は籠の中で飛びまわっていたが、その翌日虫は土の中から出てこないで、次の日は雨であった。これは虫が天気の変化を予知して行動したと思え、これは晴雨計や気象台の機械よりもずっと正確に予報するという。昔は空の雲だけでなく虫の様子を見て天気を予想することが盛んに行われたらしい。

これからの秋は様々な植物が野山を美しく彩る季節で、日本人は古くから特に夏から秋への季節の変わり目を敏感に感じるようで、過ぎ去っていく季節を惜しむ感情と次の季節への期待感が膨らむのかと思われる。気がついてみると、山や野原には萩、葛、撫子、桔梗、女郎花、藤袴、尾花といった秋の七草が目立ち秋の深まりを感じるものである。

猛暑から解放された中秋は山や野原の紅葉を楽しむと同時にウォーキングや登山など体を動かして体調を整えるに適した季節である。様々な方法で体を鍛えるシーズンであるが“体力は一日にして成らず”である。

